

(1) 基本的に

一本鍼の治療は、置鍼にも応用ができる。

置鍼でも、鍼を刺すときも抜くときも、刺法の三原則「手足に引く」「陽に引く」「下に引く」を守ることが大切。

浅鍼で深い所に響かせたいなら、回旋術をしてから置鍼。表位などに熱い所があれば、先ず散鍼してから刺鍼。刺すツボは一本鍼と同じだが、姿勢を考慮して無理の無いものを選ぶ。

患者さんの大きな動き、咳、くしゃみなどに配慮する。寝返りや咳やくしゃみをしなくなったりしたときには声を掛けてくれるよう、置鍼する前に伝えておく。

置鍼時と抜鍼時に鍼の本数を数え、同じか確認することを習慣にする。

患者さんを近くで見ないと、患者さんの反応が分かりにくいので注意。

肺のある所は、置鍼中に痙りが弛み、鍼が奥まで刺さり気胸になることがあるので、奥の痙りが弛んでも大丈夫な長さの鍼を使うなどの工夫をする。

一本鍼でツボが取れ効果が出せるようになってから挑戦すれば、比較的直ぐにできる。

置鍼法では、邪気よりも真気の動きが大きい。この真気の動きの気持ち良さに引かれ、置鍼による治療が好きになる人もいる。

(2) 慢性期の全身調整の手順

先ず、仰向けで、脈診、舌診、腹診をし、手の陰経→陽経、(腹)、足の陰経→陽経の順で、ツボ、特に古いツボを探し、置鍼。手の陽経は、腕を置く位置が難しいので、うつ伏せに回してもよい。腹は、切皮程度か、円皮鍼で。省略してもよい。しばらく置鍼してから、刺鍼時と同じ順序で抜鍼。

次に、うつ伏せで、首、肩、(腕)、背中、腰、足の後側の順で、ツボを探し置鍼。肋骨より下には刺さないよう気を付ける。しばらく置鍼してから、刺鍼時と同じ順序で抜鍼。

仰向け、うつ伏せどちらも、置鍼中に古いツボや古い病に関わるツボに補の灸頭鍼をすると効果的。

仕上げに、座位で頭の熱い所に散鍼した後に、手甲に引き鍼。

(3) 簡便法の手順

1. 肩や腰など背中側の症状

ラクな寝方で寝てもらい、手甲、患部の周り、足の陽経の順に置鍼。置鍼中に古いツボや古い病に関係するツボに補の灸頭鍼をすると効果的なのは、同じ。抜鍼は、上から下に、首、肩、背、腰、足、最後に手甲の順で。

ラクな寝方で寝てもらうのは、置鍼中の患者さんの大きな動きを少なくするため。

手甲は置鍼しにくければ抜いてしまう。

仕上げに、頭に散鍼し、手甲に引き鍼。

2. 養生、体質改善

仰向けで、腹への補の灸と組みあわせる。手陰経の肘の近く、足の陰経～陽経の順で置鍼した後に、腹の古いツボに補の灸。刺鍼と同じ手順で抜鍼。

仕上げに、頭に散鍼し、手甲に引き鍼し、手の指端に灸。

指端の灸は、目覚ましなので、治療した後に寝られるときは省略してもよい。

3. 手足の肘膝から先で自己養生

自己養生として、自分の手の届く範囲に円皮鍼を簡便法の手順で貼るのもよい。その場合には、その上や近くへの間接灸や操体法などの運動法を併用してもよい。一人で右手の治療もできて便利。

手足の肘膝から先のツボに円皮鍼を貼るだけでも、かなり改善する。経絡の効用を感じる。

(4) おわりに

「今まで置鍼して大丈夫だったのに、頭痛など治療後の辛い症状を訴えられた」という相談を受けることが2000年以降に増えてきた。近頃は邪気が多く溜まっている人が増えてきているせいかなと思う。そんな時に以上のような手順で置鍼抜鍼してもらったら、それからは治療後の辛い症状の訴えが減ったと言う。

説明した置鍼は例なので、慣れている置鍼法に応用してください。

要点：

- ① 刺鍼時も抜鍼時も「刺鍼の3原則」を守る
- ② 深いツボに響かせたければ刺鍼時に回旋術
- ③ 後始末は、頭に散鍼した後に手甲に引く